

京伝黄表紙の残照

——文化末期における合巻を中心に——

鈴木奈生

はじめに

山東京伝は、「天明年中より洒落本の新作、春毎に出て評判よからぬはなく、小本・臭草紙共に、滑稽洒落第一の作者と称せられたり^①」と『近世物之本江戸作者部類』にて、評されたように、天明期には洒落本（小本）と黄表紙（臭草紙）を以ってその地位を確立していた。その後、筆禍を経て洒落本の筆は折ることとなるが、黄表紙に関しては、文化四年に合巻形態の作品を刊行するまで、時流に合わせて作風を変化させつつ継続的に執筆を行った。

その京伝黄表紙の影響作は散見するが、とりわけ寛政期後半から享和年間に刊行された見立てなどによつて平易に教訓を暗示した作品（以下「教訓見立てもの^②」と称する）から取材したものが多く認められる。この現象は、それらの黄表紙が後世における享受を可能にする普遍性を有した素材であることを示している。このような後世における影響という観点から京伝黄表紙の文学史的的位置付けについては、改めて検討する余地があると思われる。

本稿ではその端緒として、文化末期に刊行された京伝自身および弟の山東京山による京伝黄表紙に依拠した合巻作品について取

り上げたい。京伝・京山が合巻という媒体において、なぜ京伝の旧作黄表紙を利用したのか、また刊行時期が文化末期頃に集中しているのはなぜか、という疑問を軸としてその出版背景を考察してゆきたい。

一、京伝・京山の「黄表紙風の合巻」

文化期には、黄表紙から合巻へと草双紙の様式に変遷がみられたが、その形式の変化は、敵討物流行による黄表紙の長編化を受けてのものであった。文化後期は合巻の形式が定着してきた頃とされ^③、敵討物や御家騒動物の作品が席巻していたが、一方で、旧来の黄表紙的な内容を持った作品も少なからず存在した。例えば、式亭三馬や十返舎一九が多数の黄表紙的な内容の合巻を手掛けたことが指摘されており、吉丸雄哉氏は、三馬作の合巻で、「全体を貫く大きな筋はあるものの、一丁ごとに趣向が完結し、絵と文がともに相まって笑いを生み出すという黄表紙の様式が再現されている」ものを、「黄表紙風の合巻」と呼ぶことを提唱した^{④⑤}。本稿ではそれに倣い、黄表紙的な滑稽味を持った合巻を「黄表紙風の合巻」と呼ぶことにする。

文化期には、京伝・京山による「黄表紙風の合巻」も刊行されており、以下に挙げる作品がそれに該当する。

○『万福長者 栄華談』(京伝作、文化六年、西村屋与八板)

○『十六利勘略縁起』(合巻仕立滑稽本、京伝作、文化十三年、丸屋甚八板)

※本作は合巻仕立の滑稽本であるが、京伝の旧作黄表紙を利用しており、「黄表紙風の合巻」の特徴を有する。

○『人心掃箒壮子』(京山作、文化十三年、森屋治兵衛板)

○『気替而戯作問答』(京伝作、文化十四年、森屋治兵衛板)

○『腹中名所図会』(京伝作・京山補、文化十五年(文政元年)、森屋治兵衛板)

○『息子／家賦／身持扇』(京山作、文政三年、丸屋甚八板)

※本作は文政三年刊行であるが、序文にて文化十四年に執筆した原稿を基にしたことが示されている。

『万福長者栄華談』を除いた五作の刊行は、文化末期前後に集中しているが、京伝は文化十三年九月七日に没しているため、『気替而戯作問答』(以下『戯作問答』と略す)・『腹中名所図会』・『身持扇』は没後の刊行となっている。京伝の生前に刊行された『十六利勘略縁起』は、寛政十一年刊行の黄表紙『京伝主十六利勘』の焼直しであり、『人心掃箒壮子』は滑稽な作柄の「黄表紙風の合巻」ではあるが、文化七年刊行の京山作滑稽本『鸚鵡八芸台所譚』を踏襲した内容で、京伝の黄表紙には依拠していない。対して、没後に刊行された『戯作問答』・『腹中名所図会』・

『身持扇』からは複数の京伝旧作黄表紙を参照した形跡が窺え、京伝の死の前後で方法の差異が見受けられる。はたしてこの差異は何を意味するのであろうか。

二、『気替而戯作問答』再考

京伝が没した翌年に刊行された『戯作問答』は、京伝黄表紙からの利用が最も直接的に行われている作品である。本作の梗概について、佐藤至子氏が簡潔に纏めたものを引用する。

戯作者・難答庵の家に兎屋角右衛門・蛭屋牙藏・亀の毛庵という三人の客がやってきて、様々な話題について難答庵に問いかける。その一つ一つについて、難答庵はもつともらしくこじつけた答えを述べる。この問答が延々と繰り返される。一つの話題には概ね半丁から見開き一丁程度の紙面が費やされる。こじつけの答えと滑稽な挿絵が読む者に笑いを催させるものになっている。難答庵の鼻が獅子鼻であることと、その名前が山東庵をほのめかしたものであることから、これは山東京伝を暗示する人物といつてよい。(中略)／さて、問答の後、三人の客は天狗の姿に変わり、難答庵を「先生は古今稀なる博学多才」などと褒め称える。それを聞いた難答庵が高慢になり、鼻を高くすると、書齋にかけてある「我心」という額から「心」の字が抜け出て、難答庵をたしなめる。そして「卑下」という毛で作った筆で難答庵の顔をなで、一時は高くなったその鼻を「出来合ひの鼻」にする。巻末には難答庵から獅子鼻が飛び去る様子が描かれており、現れた面長の

顔立ちは縞の羽織に襟巻きをした格好も含めて、『長髯姿蛇柳』冒頭の肖像によく似ている。

本作は、難答庵と客との問答を一場面ずつ連ねた構成となっている。問答の手柄や挿絵の多くは京伝の旧作黄表紙に依拠しており、京伝黄表紙を繋ぎ合わせた作柄であることが、先行研究によって指摘されてきた。例えば、山本陽史氏はその典拠について、「主として寛政後期から享和年間にかけての、教訓を見立絵本的に図示したストーリー性の希薄な作品を取っていることがわかる」と述べている。

本作の典拠研究としては、山本氏の他に佐藤至子氏によるものが備わる。それらの先行研究を踏まえつつ改めて分析を行ったところ、やはり本作に利用された黄表紙は、寛政から享和年間にかけての「教訓見立てもの」が中心であることが確認された。絵に關しては、出典作品からの撰取が明らかに認められる場面が大部分を占めるが、典拠となる絵を忠実に再現した箇所他に、人物・物の配置や向きを変えている箇所(図一・図二)、出典作中の幾つかの場面から要素を抜き出し一丁に配置し直した箇所(図三・図四・図五・図六)などがあり、場面によって方法は異なっている。対して文章は、絵に比して出典作品に依拠する程度に開きがあり、文章を殆どそのまま流用している箇所や、一部のみを利用した箇所、また絵は利用しているが文章は新たに付されている箇所などが見られる。これらに加えて、絵・文ともに典拠となる京伝の旧作が確認出来なかった場面も一部存在するので、大幅に京伝黄表紙に依拠しているものの、それを単純に繋ぎ合せた作品であるとは一概に言えないようである。

図一 「戲作問答」五才



図二 「怪談摸摸夢字彙」(享和三年刊) 十二ウ



図三 『戯作問答 十二ウ十三オ』



B

図四 『平仮名銭神問答』(寛政十二年刊) 七ウ八オ



B'

A'

図五 『平仮名銭神問答』十五才



図六 『平仮名銭神問答』十才



D'

序年記に「文化十三年丙子壬八月稿成」と記されるように、本作は京伝が執筆した「京伝作」として刊行された作品である（腹中名所図会）は「京伝作・京山補」。京伝の絶筆であることや、内容が複数の旧作黄表紙から抜き出した話を繋ぎ合わせたもので、その頃の京伝の合巻としては異色であるといった特徴ゆえに、先行研究における言及も多い。小池藤五郎氏や水野稔氏は、本作は物語性を重視した合巻が続く中での新機軸ではなかったかと評し、山本陽史氏は、滑稽性を前面に打ち出した形式は他の京伝の合巻にはほとんど例を見ないことから、『戯作問答』は京伝が「戯作回帰」を志向した作品であったのではないかと位置付けている。

これらの説では、本作が京伝の生前に成稿していた「京伝作」であるということが前提となっている。これに対して津田真弓氏は、作中に京山に所縁のある商品の広告が大きく書かれていること、巻末に置かれた京伝の肖像画は死絵と思われること、表紙・見返しに京山が揮毫していることの三点から、本作には京山の関与が大きいのではないかと見解を示した¹⁰⁾。さらに佐藤至子氏は津田氏の言説を受け、京山の関与ということを念頭において本作の再検討を行った。佐藤氏は、京伝の文化十年代の合巻は本作を除けば全て物語性に重点を置いた作品であるが、その中には、読本から挿絵や登場人物を再利用した例や、自作の黄表紙を焼き直し改作した例があることを挙げて、情熱を傾けていた『貫重集』の刊行を控え、効率よく合巻を作るために旧作の再利用を行ったのではないかと推測した。そうした執筆状況において滑稽性の強い作品を書こうと思えば立つとは考え難く、旧作黄表紙の繋ぎ合わせという消極的な方法を用いた『戯作問答』は、従来評価されて

きたような京伝がマンネリ化した作風を打開しようとした作品であるとか、戯作回帰を意図した作品であるとは考えられないと述べている。また、津田氏が指摘した京山の関与という点に関しては、旧作の焼き直しという方法が追善作を作る時によく用いられたものである点や、作中に難答庵が「わしが身内」と言う「ぎやう山」という人物が登場する点などから、本作が京伝を追善する内容を持つとともに、亡き京伝とのつながりを印象付けるという京山の意図を含んでいると指摘している。

先行研究において争点となっているのは、本作が京伝の作であるのかそれとも京山による関与があったのか、という作者の問題と、戯作的な内容への回帰を積極的に試みた作品であるのか否か、という作品の位置付けについての二点である。『戯作問答』の出版背景を明らかにするために、この二点について改めて検討を加えたい。

まず、京山の関与という点に関して、津田氏が指摘した三点について確認したい。表紙・見返しについては、京伝が九月に亡くなっていることを鑑みれば、京山が担当したという蓋然性は高いであろう。巻末の肖像については、津田氏が京山の筆で書かれていると指摘している『長髯姿蛇柳』（京伝作、文化十四年刊）口絵に載る京伝の肖像は、通常冒頭に記される序文の代わりに死絵として配されたものと考えられるので、それに酷似した『戯作問答』の京伝像も、京伝の死を受けて加えられた一種の死絵と見て妥当であろう。広告に関しては、例えば『琴声美人伝』（京伝作、文化十三年刊）を見ると、前編最終丁では「山東京山製」の商品が「京伝家伝」の商品と並んで宣伝されているが、後編最終

丁では「京伝自画賛」「読書丸」といった京伝商品が大々的に扱われている。それに比して本作の最終丁は「珊瑚碎」や篆刻などの京山の扱った商品の宣伝で占められており、やはり京山が作画的に書き入れたものと考えられる。

では、京山の関与はこのような後からの加筆が可能である謂わば付属的な要素のみに限られるのだろうか。佐藤氏は、難答庵の「身内」である「ぎやう山」が登場する「恋に使われる・利に使われる・名聞に使われる」（場面の仮題は注7佐藤論文による）ことをめぐっての問答（二十一ウ二十二オ）の場面について、挿絵の趣向は京伝の黄表紙『四人詰南片傀儡』（寛政五年刊）を踏まえていると考えられるが、挿絵の構図と文章は独自に作られたものであると指摘している。また、先行研究では指摘されていないが、同じく典拠が確認できない「商いの嘘」（七十七ウ十八オ）の問答については、文政三年刊行の京山作合巻『身持扇』に、「商人の嘘ハせんごくの謀事。あの人ハ世事がよいと言はる、人ハ嘘を上手につく人なり」（二十三ウ）と類似した話柄が確認される。むしろ『戯作問答』から取り入れたとも考えられるが、二十一ウ二十二オと同様に先行作が見出せないという点から、京山が手掛けた可能性が高いと言えるのではないだろうか。加えて、物語の最後にあたる高慢心が兆した難答庵を「心」の字が嗜める場面にも注目したい。

汝つね、その身の不才を知りて筆の先でも高慢を言わず、獅子虎伝蔵不学の身なれば、大筋力みの心なしと喜んでゐたりしに、今木の葉天狗らが博学多才とちよつくりかえすを真事と思ひ、少しうかれの色見えて天狗道に入らんとするハ、

大いなる誤りなり。三十年來戯作のおかしみで広めた名なれば、言はゞ筆先の豆蔵と異ならず。さればこそ、戯作者けきしやと安くやすされるハ、汝が生涯なんぢのせうがいの不幸なり。

この文章で看過できないのは、「不才」という言葉である。京山は自身を形容する際に、しばしばこの言葉を使用している。当箇所では、それが京伝を擬した「難答庵」に対して用いられているわけだが、京山が戯作者としての自身を表すのに使用してきた「不才」という言葉が選択されていることからは、やはり京山の作為が推察されるのである。また、京伝の通称である「伝蔵」を持ち出している点も京伝自身の行為らしくはなく、如何にも京伝の死を受けて施された印象を受ける。これらの点から、本作の締め括りである当場面は、京山が全面的に手掛けたものと見て問題ないと思われる。その内容から考えて、この文章は京伝の戯作者としての生涯を諧謔的に記した「追善文」としての意味合いを持っているのではないだろうか。

以上のように、内容面においても京山が関与した蓋然性が高いと推測される部分が含まれるので、「文化十三年丙子壬八月稿成」「山東京伝作」という額面通り、京伝が執筆した草稿がそのままの形で出版されたとは考え難い。佐藤氏も、「巻末に死絵を挿入したところだけが京山の発案で、獅子鼻の難答庵と客の問答という趣向は京伝の考えたものであり、たまたま京伝が急死したため、その部分が追善的な内容に見える結果となった、とも考えられる。偶然にそうした内容のものが遺されたということになるのだが（中略）はたしてどこまでが京伝の原案によるものなのか」と疑問を呈している。ただ佐藤氏は結論としては、「気替而戯作問

答』は、作り方の面で京伝の積極的な姿勢は見いだせず、内容的には急死した京伝の追善草双紙としても読める。京伝と京山をほのめかした人物を登場させている点は、京伝没後に京山が行った追善行事と同様、京伝・京山兄弟のつながりを読者に印象づける意図も感じられる（中略）『気替而戯作問答』はやはり異色の作品であり、その成立に京山が深く関与していることをうかがわせるのである」と、その疑問については留保した形で論旨を纏めている。はたして本作は京伝の草稿に基づいて作られたのか否か。

ここで、翌文化十五年に刊行された『腹中名所図会』と比較してみたい。本作は、戯作者である半道庵が見立てた名所巡りをする趣向で、痰関・むなさき宿といった人体を見立てた名所、しあん桜・老の坂といった人間の一生を旅に見立てた名所、てには村・不学庵といった学問の階梯を旅に見立てた名所を見物する。人生行路を道中記見立てによって説く趣向は、『貧福両道中之記』（寛政五年刊）以来、『凸凹話』（寛政十年刊）・『悟福迷所独案内』（享和三年刊）、『分解道中双六』（享和三年刊）などで、京伝が度々焼き直して用いたものであった。本作は、全体としてそれらの京伝黄表紙を思わせるような作柄となっているが（図七・図八）、挿絵の中には前掲の作品以外の黄表紙からも着想を得たと推察される部分も複数見られる（図九・図十）。

京伝黄表紙へ依拠する程度を比較したとき、本作は「戯作問答」とは異なり文章や挿絵をそのまま撰取している箇所は殆ど見られず、複数の京伝黄表紙の要素を撰取しつつ、一作となしている。また「戯作問答」には「京伝作」と記されていたが、本作の場合には「京伝作・京山補」とされており、これは京山自序にて「山

図七 『腹中名所図会』 十一才



図八 『貧富両道中之記』 六才



図九 『腹中名所図会』 二十八ウ



図十 『御詠染長寿小紋』 (享和二年刊) 三ウ



東庵主かの骨董集をあらはし、ほたるこいくの窗のもとに、一箇の気格をたてしより、赤本の作は齧がことし。されバ僅にその趣向をたて、いまだ稿を脱せざる腹中名所図会の作あり。予に補綴せよといふ。これハほせつにもない事と固辞すれども、ゆるさされバ、いな舟のいなみがたく猪牙舟のちよつくり補して、而て新板とす」と出板背景について述べられていることにも矛盾しない。

『戯作問答』は、場面によって京伝黄表紙へ依拠する程度に差異があることは既述の通りであるが、「京山補」と明示されている『腹中名所図会』が旧作の繋ぎ合わせではなく全体を通じて新たに構成されている点を考慮すると、『戯作問答』においても、特に典拠となる京伝の旧作が確認できない場面などは、京山が手掛けた可能性が高いと考えられないだろうか。

この点について、『戯作問答』刊行前後の動きと併せて検討を進めてゆきたい。

三、森屋治兵衛と京伝・京山の「戯作物」

先行研究においては言及されてこなかったが、本作の板元錦森堂森屋治兵衛は、『戯作問答』の前年に刊行された『人心掃猪壮子』と、翌年刊行の『腹中名所図会』の板元でもあった。『人心掃猪壮子』には、「百本桜猫忠信」という作品の予告が「すべて猫世界にて、千本桜の書きかへ、おもしろき戯作の草双紙なり」と掲載されており、さらに「いろいろおかしき戯作物、京伝京山作にて当秋より出板仕候」という一文が続けられている。つまり、

京伝・京山両名の「戯作物」を出板していくという企画が、本作が刊行された文化十三年の時点で構想されていた事実が窺えるのである。

津田氏はこの予告から、「文化末期に京伝が戯作回帰志向を持ったことが知られているが、ここで兄弟の連名で意欲を示すように、山東庵の一人として、京山も積極的に滑稽な世界を模索する」と当時の京伝・京山の執筆姿勢を看取している。氏は、『十六利勘略縁起』や『戯作問答』、『腹中名所図会』を京伝の戯作回帰と捉える見解を前提としているため、この企画をあくまでも京伝の戯作回帰志向を受けての動きとして位置付けているのである。しかし、この見解には即座に首肯しかねる。なぜならば、京伝・京山の戯作を出板するという企画は、むしろ板元および京山主導によるものであったと考えられるからである。

京伝が生前に手掛けた「黄表紙風の合巻」は、『万福長者栄華談』と『十六利勘略縁起』の二作であるが、前者は「合巻作風心得之書」という外的要因の影響によって刊行された作品、後者は追善作として間に合わせるために急作したものと推察されるので、そこに京伝の積極性は見出せない。対して京山は、文化十年代に「絵入読本」の構想を抱いていた。『夏が文開て水無月』(文化十二年刊)に「へ多入／中本」仮名茶話文話「猿ひき芸二郎といふもの、さまざまの芸を稽古する事をおかしくかきつゞりたる書き綴りたる書也」(文政六年刊行「重妻岩藤模様」)には、「仮名茶話文庫」(絵入中本、人情をうがたる長物語の落話なり)とみえる。『冬編笠由縁月影』(文化十三年刊)に「子宝船七人兄弟」(同年刊行京伝作『琴声美人伝』)広告に「七人の兄弟が心くに世をわたるをおもしろく書き

綴りたる戯作なり」と載る）などと予告されていた作品群がそれである。¹⁸津田氏は、この「絵入読本」は「読本といっても京山が文化六、七年で中断した江戸読本ではなく、中本の文主体の読み物という意味である」とし、試みの背景として「滑稽や世態を描き人情を穿つということが、この頃の京山の胸に大きくあった」と指摘している。「仮名茶話文庫」・「子宝船七人兄弟」はその後幾度も予告されたが、何れも実現を見なかつたようである。

そして、この「絵入読本」がしばしば予告されていたのと同時期に刊行されたのが、『人心掃猪壮子』である。本作は、掃溜めに捨てられた家財道具が各々の身の上話を語るという趣向の作品で、「古硯の旧懐」「比翼莞筵のむかしがたり」などの話が見開き一丁で展開される。諸道具は擬人化して描かれており、挿絵にもその点でおかしみがあるが、本書の眼目は絵ではなく、むしろ文章にあると思われる。次々と登場する古道具たちが、人間よろしく練り広げる身の上話の語り口こそが本作の見所であり、このような作柄は「絵入読本」で試みようとしたものと軌を一にするのではないかと推測されるのである。

さらに、『人心掃猪壮子』に予告された「百本桜猫忠信」は、未完に終わったと見えその詳細は不明であるが、猫を飼う「人情」や飼われる猫の「猫情」を描いた京山作『籠月猫草紙』(天保十三年、嘉永二年刊)を想起させるといふ指摘がある。¹⁹

「絵入読本」および「百本桜猫忠信」の例や、『人心掃猪壮子』が挿絵よりも文章に重きが置かれた作柄であったことから、京山が文化末期に模索していた「戯作」とは、題材についていかに「書き綴」るかということに眼目の置かれた、いわば滑稽本に通

ずるおかしみを持つ作品であったと推察される。そして、このような京山の姿勢から、『人心掃猪壮子』にて予告された「いろいろおかしき戯作物」とは、物語性をもたない黄表紙的な作品を指していることには相違ないであろうが、京山としては、京伝が自身の旧作を焼直したような黄表紙を直接的に利用するのは異なる方法での「戯作」を志向していたのではないかと考えられる。

仮に、従来言われてきように京伝が積極的に戯作的な作風への回帰を試みていたならば、予告には京山作の「百本桜猫忠信」のみならず、京伝作品の具体的な予告も掲載されていたのではないだろうか。板元としても当然その方が有益だった筈なので、京伝作について具体的に示されていないということは、この時点において、京伝がこの企画に具体的に取り組んでいなかったものと思われる。つまり「戯作物」の企画は京伝ではなく、度々戯作的な作品の構想を明示してきた京山の側よりもたらされたもので、『人心掃猪壮子』はその皮切りであったのではないだろうか。

とはいえ、京伝の意向を確認せずにこのような予告を載せるとは考え難いので、むしろこの時点において京伝側の了承は得ていただろう。あくまでも憶測に過ぎないが、森治と京山との間で「戯作物」刊行の構想がなされた際に、板元側としては、売れ行きを考慮してか、京山だけではなく、京伝・京山両名の作品を求めた。京伝としても、自身の旧作を利用するという手段を用いれば然程負担の大きい仕事でもないので受諾した、という事の次第であったのではないだろうか。この時点においては京伝作の方には具体案はなく、何か旧作を用いての作といった程度の見込みだったのかもしれない。

『人心掃猪壮子』以降森治からは、予告通り『戯作問答』と『腹中名所図会』という二作の「戯作物」が刊行された。津田氏が行った『人心掃猪壮子』の諸本調査では、三康本の序文に「文化乙亥の大みそか」（文化乙亥は文化十二年にあたる）とあり、同じ文化十三年に森屋から刊行された『道雪柳腰帯』と同じ広告を有することから、本作を文化十三年刊行と判断しているが、京大本の見返しには「文化十四丁丑新春」と記され、森屋の文化十四年の新板広告にも本書の名が載っていることが報告されている。また『腹中名所図会』は、外題に「寅初春」序文に「文化丁丑晩春脱稿 同仲秋梓行」と年記があるので一般に文化十五年刊行とされているが、津田氏は、諸本の多くは黄表紙仕立てか後印本で、その中で唯一摺付表紙を有するのは三康本であると報告し、この三康本について「三康本は改題本か。外題「腹中和合神」。後光が差すかのような花魁の図の擦付表紙で六冊一編になっている。序文の年記が削られており、全体として改題された後印本の印象がある。ただし、『人心掃猪壮子』・京伝作『気替戯作問答』などが載る「丁丑新版」（文化十四年）の広告あり。他の本が後印の廉価版と言われている黄表紙仕立てだけに、こちらが先にあつて、文化十四年刊であるという可能性もある」と述べている。

前者の京大本の存在は、『戯作問答』の刊行に合わせて、『人心掃猪壮子』を文化十四年の新板として再板したものと推測される。また後者に関しては、文化十四年に起きた「△巻絵草紙一件」の影響で文化十五年刊行の合巻は全て黄表紙仕立てであったことを鑑みるに、黄表紙仕立ては廉価版ではなく文化十五年の新板であると判断してよいのではないか。三康本は外題が異なり年記も削ら

れているとなれば、合巻の装丁が旧に復してからの後印本で、同じく京伝・京山の「戯作物」シリーズである『人心掃猪壮子』・『気替戯作問答』が載る文化十四年の広告をあえて付したという可能性に思い当たる。

これら諸本の存在から、やはり森治が『人心掃猪壮子』・『戯作問答』・『腹中名所図会』を一つのシリーズとして展開し、新作の出版に際し旧作を抱き合わせて販売していたことが窺われるが、些か疑問であるのは、内容まで含めた予告がなされていた京山作「百本桜猫忠信」が、この動きの中で出版に至らなかつた点である。予告が出された時点では、積極的に「戯作」を構想していたと思われる京山であるが、結果としては、自身の作品に優先して『戯作問答』と『腹中名所図会』という二つの「戯作」に携わつたということになる。

四、京伝没後の「京伝戯作」

『戯作問答』巻末には、「△腹中名所図会へ京伝作／豊国画／森治板 右は丑の秋よりうりいだし申候」という「腹中名所図会」の広告が付されているが、看過できないのは、その後続く「此外京伝けさく品々所々の地本問屋より出版仕候」という一文である。なぜならば、これは他にも未刊作の「京伝戯作」が存在しており、それを今後出版してゆくことを謳っているように見做せる。しかし結果的に「京伝戯作」は『腹中名所図会』しか刊行されなかつたと見られる点で不審であるからだ。実際に京伝の草稿（草案）が残されていたならば、何らかの形で日の目を見ていてもお

かしくないであろう。となれば、ここで宣伝されている企画の内実は、京山が執筆した「京伝戯作」を京伝の遺稿作として出版するというものであったのではないだろうか。

この証左として取り上げたいのが、やはり京伝黄表紙からの影響が見られる京山作の合巻『身持扇』（文政三年刊）である。本作は、前編には京伝黄表紙が利用されているが後編にはその利用は見られず、一見したところ統一感に欠けた構成となっている。よって、その成立過程が些か複雑であったことが窺われるが、先行研究においては内容も含めた詳しい分析はなされてこなかった。従って、まずその梗概と京伝黄表紙の利用について確認しておきたい。

本作は三つの話題から構成されている。前編では「親告勞する、その子樂する、孫乞食する」という教訓を説いた一丁半の短い話が置かれた後（Aとする）、欲心が過ぎた男の失敗譚が続く（Bとする）。後編では、正直が過ぎる商人の息子株の話が展開される（Cとする）。全体を通じて、何でも行き過ぎることは良くないという教訓を京伝黄表紙よろしく説いてみせるが、その内実は登場人物の行き過ぎた行動から生まれるおかしみに眼目が置かれた滑稽譚である。

A・B・Cのうち、Aでは京伝黄表紙が全面的に利用されており、「親告勞する、その子樂する、孫乞食する」という教訓話に、命に関する様々な事柄を「命」という字を利用した見立てによって示した『御詠染長寿小紋』（享和二年刊）を取り合わせた構成となっている。出典作中の「命を延ばす」「金八命を釣替」「女で命を削る」「命を的にかける」という四つの題材を、挿絵は殆どそのままの形で、文章は直接的に摂取するのではなく話柄の中に沿っ

た形で利用している（図十一・図十二・図十三）。Bに関しては、一部『平仮名銭神問答』（寛政十二年刊）に取材した図像が見出せるが、その他は善玉悪玉に連なる表現や黄表紙類によく見られる小判や銭の擬人化など、明確な典拠は指摘できないものの、いかにも戯作らしいモチーフを取り入れているように見受けられる。つまりBの場合はAとは異なり、挿絵の中に僅かばかりそれらしいモチーフや表現を取り入れたという程度に留まっている。さらに後編のCに至ると、話柄自体は滑稽譚であるものの、京伝黄表紙からの取り入れは一切行われておらず、挿絵も戯作的表現を含まないものとなっている。

このように、Aは京伝黄表紙を全面的に利用したものであり、B・Cとは趣きを異にする。Bは戯作的な表現が認められるものの、部分的であり、その要素を除けば絵・文ともにCとの差異は見られない。このような本作の構成上の不統一性について考える上で、自序および板元と作者とのやり取りが記された冒頭部が手掛かりとなりそうである。

自序

此草子は文化十四年夏四月京山上京の時にのぞんで、三日三夜にこちつけたる作なり。今年梓に上すとき、て再これを閱るに、首ハ戯作のごとく胴ハ心学に似て尾ハ首蛇に撓ざる戲言なれば、鳴声あんまの笛に似たり。一直なさんふりもあれど、一道の□を経バ一具の機関がらりとちがひて、丸でまる直さねバナらさかのこのて柏の恨ハ、梓上の恥をさらしの手拭硯の汗を拭ふのみ。

文政二年冬十月 山東庵京山（印：巴山人）

図十一 『身持扇』 四ウ五才



図十二 『御詠染長寿小紋』 四ウ五才



図十三 『御詠染長寿小紋』 五ウ



三ウ四ウ

今年文政乙卯の春何事も打捨て、卯月の十五日月影のさしか、りたる用向ハあらかた隅田川へとぶん流し、すでに西遊の□をひかんとするに、赤本の板元丸甚来たりて、かねぐお頼み申たる新板の作ハいかにと催促に（中略）空しく机に差し向かひ、煙草輪に吹く折から伝笑様からお遣ひと下女が差し出す尺一を披き見れば、先日拝借の御本返上との文言にその本を披いて見れば、彼の其碩が例のすさみ、これぞよき種瓢とまき残したる種を拾いて、ついに五冊の筆をはしらす事とハなりぬ。

二つの文章を併せると、文政三年の新板を板元から依頼された際に、文化十四年に執筆していた草稿（種）を利用しようとしたが、そのままでは相応しくなかつたので、江島其碩の浮世草子『善悪身持扇』の趣向を用いて新しく構成し直したという経緯が推察される。そしてその場合に、「文化十四年夏四月京山上京の時にのぞんで、三日三夜にこごつけたる作」である「まき残したる種」は、Aの部分に利用され、BおよびCが、新しく趣向を立て直した部分であるとは考えられないだろうか。Aがどの程度その草稿の原型を留めているかは判断しかねるが、B・Cとは明らかに趣を異にするので、Aが本来B・Cとは異なる趣向で書かれたものであると想定すれば、全体として統一感に欠けることも合点がゆくのである。なお、Bにも戲作的な表現が用いられている理由については明確な見解を示すことができないが、Aと共に前編に収めるにあたって全体の雰囲気を整えるために、物語の筋を邪魔しない程度に取り入れたと推測しておきたい。

さて、ここで再び『戯作問答』巻末の「此外京伝けさく品々所々の地本問屋より出板仕候」という宣伝を鑑みると、文化十四年に編まれ『身持扇』にその痕跡を残すと推定される草稿は、ここでいう「京伝戯作」の一つであったのではないかと考えられる。恐らくそれは「御詠染長寿小紋」を趣向の中心に据えた作品であったが、何らかの理由で未刊行に終わったのであろう。その未刊作と『腹中名所図会』との執筆時期が同時期である点に加えて、『身持扇』に「辛抱といふ棒にかじりつきて見事番頭になり」（四ウ）とあるのは、『腹中所図会』に「しんぼう」という棒に取り付いて身代を傾けることのないようにしろと説く場面（二十八ウ

二十九才」と同例で、さらに両者とも全体を通じて「分相應に生きよ」という教訓を説くという点でも共通している事実は、やはり京山が複数の「京伝戯作」を同時期に構想していたことを示しているのではなからうか。そして、『身持扇』にその草稿が京山自身の作であることが明示されている以上、『腹中名所図会』も「僅にその趣向がたて」られていたものを「補綴」したというのは京伝の遺稿作と仕立てるための方便であって、やはり京山による企画のうちの一つであった蓋然性が高いと思われるのである。

『腹中名所図会』の狂言回しである「半道庵」は「巴山人」の印を顔に持ち、本文に「兄弟そろいしへば作者ありけり」(一才)と語られていることから、京伝のみならず京山をも包括したような人物設定となっていることが指摘されている。⁽²⁾ こういった点から京山の作為が看取される。

五、京山と「山東庵の戯作」

『腹中名所図会』・『身持扇』の分析を通じて、これらは京山が編集・企画した京伝遺稿作としての「京伝戯作」であった可能性について言及した。これを踏まえ、改めて『戯作問答』について検討を加えてみたい。

『腹中名所図会』にて、明らかに京伝と京山とを包括した造詣がなされた戯作者が「半道庵」と命名されていたが、『戯作問答』における「難答庵」という名も、問答という趣向に合わせた「山東庵」の振りという以上の意図を含ませているように思われる。というのも、かつて京伝が自作に獅子鼻をもった作者や語り手を

登場させた際に用いた名称は、「方便和尚」・「講師京伝」・「赤本先生」などであり、「山東庵」を振ったものは見られないからだ。獅子鼻をもつ「難答庵」は確かに京伝個人を暗示した人物であるものの、京山も包括する「山東庵」という号を名称に用いたことには、『腹中名所図会』と同様に京山の作為を思わせる。その場合、難答庵と客との問答という枠組自体も京山が発案したのではないかという可能性に行き当たり、やはり本作も「京伝戯作」の構想を抱く京山が執筆した作品なのではないかと考えられるのである。

しかしながら、『戯作問答』の中で、京伝黄表紙に大幅に依拠した場面とそうではない場面が混在する点に関しては些か疑問が残る。この点については、そもそも京伝・京山の「戯作物」刊行という企画が構想されていたという事実が一つの傍証となりそうである。その「戯作物」の企画として、多忙であった京伝は自身の旧作黄表紙を継ぎ接ぎにした作品を用意していたが刊行を見ずに亡くなり、京山はその草稿を利用しつつも、「難答庵」との問答という枠組みをたて、さらに新たに構成した場面も加えることで、京伝を偲びかつ自身を喧伝する意図を含んだ作品に仕上げたのではないだろうか。『腹中名所図会』の場合には、時間的な余裕もあったので、京伝黄表紙に倣った新たな戯作を執筆したのであろう。

また、一連の作品の刊行は、凡そ以下のような経緯でなされたのではないかと推測される。『人心掃帚壮子』が刊行された文化十三年頃には「いろ／＼おかしき戯作物、京伝京山作にて当秋より出版仕候」という企画が構想されていたが、刊行に至る前に京

伝が急死した。京伝の死を受けた京山は、その企画があったことを逆手にとつて、『戯作問答』という「京伝戯作」として成稿した。同時に、その他にも「京伝戯作」を刊行してゆくことを企画し、その一つとして『腹中名所図会』が刊行されたが、その他に準備されていた作品は未刊に終り、企画も立ち消えとなった。

本稿ではひとまずこのような経緯を提示しておくが、あくまでも周辺事項からの推測に過ぎず、『戯作問答』・『腹中名所図会』が、京伝の存命中に稿成していた可能性を完全に否定することは出来ない。しかしこれらの作品が、追善事業が営まれる時期の出版物として相応しいものであると判断され、加えて「京伝戯作」刊行が公に宣伝されていたのは事実である。換言すれば、当初の京伝・京山作の「戯作物」の企画が、遺稿作出板という事業の中に回収されたということであるが、そもそも「戯作」を遺稿作として刊行することを試みた背景はいかなるものであったのだろうか。

『腹中名所図会』が刊行された文化十五年（文政元年）には、京山の単独作品は刊行されておらず、京伝・京山含め本作が唯一の作であった。当時の状況について津田氏は、「関西遊歴の翌年（文政元年）と、火事で家を失った文政十二年の翌年を除いて、京山は毎年数部ずつ戯作を出していく。この二度の出版がない年というのは、即ち京伝店の建て直しが必要だった時である。いずれの場合も店が軌道に乗るまで、常より刊行する本の数が少なくなるので、店の経営が生業の根幹であったということなのだろう。特に京伝亡き後の数年は、極端に少ない。後妻の百合は一人で店を守っていた時に八十兩の赤字を出したというし、何より看板の京伝が不在となつて、必死に立て直す必要があつたのではないだ

ろうか」と指摘しており、首肯される。京伝作品は、京伝店の宣伝媒体ともなつていた。その宣伝は京山の作品中でもなされてきたが、主人なき後の京伝店の人気の維持を考えると、当然「京伝作」として出版した方が店の宣伝の為に都合がよかつたと思われ、自作に優先させて、『腹中名所図会』のような京伝遺稿作を出版したことは、店の為という事情が窺える。

その一方で、唯一の刊行作が「戯作」的な内容であつたことには、「山東庵」という看板を背負う戯作者としての京山の拘りが存在しているのではないかと思われる。というのも、同じく京山が京伝遺稿を補作し、前編が京伝作、後編が京山作として刊行された『家桜継穂之鉢植』（文政五年刊）の場合には、京伝没後に板元から後編の補作を依頼されたが断つたという経緯が自序に記されているからである。刊行が遅れた理由として、文化十四年は旅に出ていて、その後も京伝店の再建で忙しく、日が経つてしまつたということが述べられている。この例は、板元からの依頼であつたとしても断ることが可能であつたこと、また単に京伝遺稿作を刊行するという話ならば『腹中名所図会』以外にも選択肢があつたことを示しており、この年の新板として『腹中名所図会』が採用されたことは、積極的な選択であつたことが推察されるのである。

ここで着目したいのが、『戯作問答』と同じく文化十四年刊行の京山作『二人若衆対紫色』の口絵である。本作の口絵部分は、京山の書齋に赤本時代から人気のあるあつた化け物や、京伝黄表紙で人気だった艶二郎や悪玉が、出番を求めにやってくるという内容となつており、本編の筋とは関係がないことから京伝の没後に書

かれた可能性も指摘されている。²⁶⁾ その文中に艶二郎の台詞として、「おなじみふかき一代目の司馬全交、お名の高い喜三三さんも故人となられ、頼みにおも京伝子は、寄てもつかれぬ骨董集、近年真面目で馬があはず。戯作でひろめた山東の看板かけた京山子、昔の戯作に帰すへき、復古の心があらふなら、再び世に出る善玉しい」とあり、「戯作でひろめた山東の看板かけた京山子」という部分からは、敵討物が席卷する中で物語性のある作品を手掛けたが、やはり作者のブランド「山東庵」としては「戯作」こそが看板であるということを主張しているように見受けられる。そして、その「山東」の「看板」たる「戯作」、換言すれば、「山東庵の戯作」という意識が体现されているのが、『戯作問答』・『腹中名所図会』という「京伝戯作」だったのであろう。

京山は、京伝作品の魅力は見立てなどの趣向が縦横無尽に用いられた〈絵〉にあり、京伝ひいては山東庵の戯作の真骨頂は、そのような〈絵〉の要素が主となる作品であると考えていたのではないだろうか。そういった評価が、見立てなどによる〈絵〉の面白さがとりわけ多分に発揮された寛政・享和期の京伝黄表紙を、「京伝戯作」の題材として選択させたのだと推察される。

また、作中に「ぎやう山」や「半道庵」など京山を想起させる人物を登場させるには、物語性のある合巻よりも「黄表紙風の合巻」の方が、形式上都合がよかったという側面もあったかもしれない。

『身持扇』が刊行された文政三年には、「合巻絵草紙一件」の主尊者であった永田備後守が前年四月に死去したことで、合巻体裁が復活することとなった。その中で刊行された本作は、既述した

通り全編を通じて滑稽な「黄表紙風の合巻」ではあるが、後編には京伝黄表紙からの取材は見られず、挿絵も通常の合巻と同様のものではあった。本作中には前後編ともに芝居へゆく場面があり、その部分の挿絵には舞台の様子が役者似顔絵の人物とともに描かれている。この場面は筋の展開と連関がなく挿入されている印象を受けるので、合巻体裁が復活し華やかな作柄を求める要請との兼ね合いがあったのかもしれない。これらの点から考えるに、わざわざ文化十四年に執筆した草稿を利用する必要もなかったように思われ、むしろ『御詠染長寿小紋』を利用した冒頭部は無理やり挿入されている感が否めないのである。

京山は本作にて自身の顔を京伝が使用していた印「巴山人」で表し、序文の「山東庵京山」という署名にも「巴山人」の印を添えているが、この行為は、事実上京伝の二代目を自認していた京山が自らそれを表明したものであると指摘されている。²⁸⁾ 穿ちすぎかもしれないが、いよいよ正式に二代目の巴山人であることを表明する機会であるからこそ、「京伝戯作」として執筆した『御詠染長寿小紋』に取材した作品をわざわざここに用いたのではないだろうか。

『身持扇』という作品にも、やはり「巴山人」としての「山東庵の戯作」への意識が現出していると思われてならないのである。

おわりに

本稿では、文化末期の京伝・京山の「黄表紙風の合巻」の分析を通じて、それらの作品は京山が企画・編集した「京伝戯作」で

あり、一連の行為からは、京伝亡きあとの「山東庵」(および「京伝店」)を継承し盛り立ててゆく様子が看取されるということを考察してきた。さらに、「京伝戯作」の題材として、「教訓見立てもの」の黄表紙が採用されている点には、〈絵〉という要素こそがその真髄であるという、京山の「山東庵の戯作」(「京伝戯作」)に対する意識が垣間みえるということを指摘した。

京伝黄表紙の影響作は以降も多数刊行されてゆくが、その範囲は草双紙などの小説類に留まらず、浮世絵という媒体においても享受がなされている。例えば、善玉悪玉の他、『戯作問答』・『腹中名所図会』・『身持扇』にも利用された道中記見立てものの作品や『御詠染長寿小紋』における心の見立てを題材とした作例が確認されるが、こういった事例は京伝黄表紙における〈絵〉という要素が、それ自体で完結した存在たり得る事実を示しているよう。黄表紙の挿絵が絵画化される例を他作者においては知らず、京伝黄表紙の享受には、〈絵〉がもつ魅力や普遍性が大きく寄与していたものと考えられる。

本稿での考察は、文化末期の山東庵による「黄表紙風の合巻」の事例のみに留まってしまったが、京伝黄表紙の位置付けを再検討してゆく上で、作品の享受と〈絵〉という視点からの事例研究に関しては別稿を期したい。

【注】

- (1) 引用は徳田武校注『近世物之本江戸作者部類』(岩波書店、二〇一四年)に拠る。
- (2) この名称は、山本陽史氏が「山東京伝の「抵抗」―寛政八

年から文化三年まで―」(『応用言語学研究』四、二〇〇二年三月)にて、提唱したものである。

(3) 鈴木重三「合巻について」(文化講座シリーズ9、大東急記念文庫、一九六一年)、高木元「草双紙の十九世紀―メディアとしての様式―」(『江戸読本の研究―十九世紀小説様式攷―』、ペリかん社、一九九五年)。

(4) 三馬作品は、本田康雄「式亭三馬の文芸」(笠間書院、一九七三年) 棚橋正博『式亭三馬』(ペリかん社、二〇〇七年)、一九作品は、康志賢「艶二郎もののパロディーの転用と趣向―十返舎一九作合巻『色男大安売』を通して―」(『国語国文』七七・三、二〇〇八年三月) 参照。

(5) 「式亭三馬の「黄表紙風の合巻」」(吉丸雄哉『式亭三馬とその周辺』二章三節、新典社、二〇一一年。初出『国語国文』七四・四、二〇〇五年四月)。

(6) 文化五年の「合巻作風心得之書」による影響で刊行された作品とされ、文化末期の諸作とは作柄も異なるので考察に加えない。

(7) 佐藤至子「山東京伝の合巻『気替而戯作問答』について―京山による追善作の可能性―」(『語文』一三三、二〇〇八年一月)。以下本稿における佐藤氏の言説は、本論文に拠るものとする。

- (8) 林美一校訂『腹筋逢夢石』(江戸戯作文庫、河出書房新社、一九八四年)、津田真弓『山東京山年譜稿』(ペリかん社、二〇〇四年)、同『江戸絵本の匠 山東京山』(新典社、二〇〇五年)。
- (9) 山本陽史「戯作者の晩年―山東京伝の戯作回帰―」(『解釈』

三五・五、一九八九年五月)。以下本稿における山本氏の言説は本論文に拠るものとする。

(10) 先行研究にて指摘されていない典拠として、六ウ七オの絵・文が『枯木花大悲利益』(享和二年刊)十一オを利用してゐる点、一四ウ一五オの絵が『式刻佃万両回春』(寛政十年刊)に基づく点が挙げられる。

(11) 小池藤五郎『山東京傳の研究』(岩波書店、一九九四年。

初版一九三五年)、水野稔『京伝合巻の研究序説』(『江戸小説論叢』、中央公論社、一九七四年)

(12) 注8津田前掲書『山東京山年譜稿』

(13) 例えば、『十六利勘略縁起』は自序に「故人松緑羅漢に扮し」とあることから、文化十二年十月に亡くなった歌舞伎役者初代尾上松緑の追善作と見られる。佐藤氏は黄表紙『京伝主十六利勘』を利用したのは、松緑の当たり役であった羅漢を趣向に据えているからだとし、追善作として刊行を間に合わせるために急を要したので、旧作の焼き直しという方法がとられたのではないかと指摘する。

(14) 引用は、都立中央図書館特別文庫蔵本(九六二二)による。本稿では板本の翻刻に際して、一部本文を漢字に改め、適宜句読点を施した。

(15) 内田保広「「不才」の作家―山東京山試論―」(水野稔編『近世文学論叢』、明治書院、一九九二年)

(16) 引用は、上田市立上田図書館花月文庫蔵本(外題『腹の内名所図会』、(二二六)による。

(17) 注8津田前掲書『江戸絵本の匠 山東京山』。以下本稿に

おける津田氏の言説は、特に断りがない場合は本書に拠るものとする。

(18) 「絵入読本」の広告文の引用は、注8津田前掲書『山東京山年譜稿』に拠った。

(19) 注8津田前掲書、同「山東京山作『朧月猫草紙』にみる合巻の本文と戯作性」(『江戸文学』三五、ぺりかん社、二〇〇六年一二月)

(20) 注8津田前掲書『山東京山年譜稿』

(21) 文化十四年初春に合巻の高価さと装丁の華美に対する咎めが出され、新板の草双紙は一時発売停止となり、翌年の合巻は五丁綴じの黄表紙体裁での発売となった。

(22) 引用は、早稲田大学図書館蔵本(へ130237834)による。

(23) 享保十五年、八文字屋八左衛門板。章題に俚諺を用い、それに相応する話を仕立てた短編集。

(24) 注8津田前掲書『山東京山年譜稿』

(25) 「合巻絵草紙一件」の影響により、文化十五年の刊行物は黄表紙的な内容を持つ作品の割合が常より多くなっており(鳥居直子「合巻絵草紙一件」考)『近世文学研究と評論』五一、一九九六年十一月。鳥居氏は、規制は内容に関するものではなかったが、黄表紙体裁にせよという通達に板元たちが過敏に反応した結果であると指摘する)、『腹中名所図会』もその状況に適合した作品であったという側面はあるが、京山の場合には前年の時点で「京伝戯作」を宣伝していることを付言しておきたい。また「京伝戯作」の刊行が『腹中名所図会』のみをもって立消えになった理由として、文政二年には多少規則が緩まった

という事実が関係していると思われる。当年の京山作は、『桂かづ川がわ都みやこ聞書』(森屋治兵衛板)・『隅田春雲老翁谷気』(西村屋与八板)の二作でいずれも物語性のある合巻である。両板元とも同年に一九の「黄表紙風の合巻」を刊行しているので、板元が前年の痛手を取り戻したいと考える中で、一九との兼ね合いなどもあり、京山には物語性のある合巻が求められたという事情があつたのではないだろうか。

- (26) 注8津田前掲書『江戸絵本の匠 山東京山』
(27) 引用は、都立中央図書館特別文庫蔵本(九三二一八)に拠る。
(28) 注8津田前掲書『江戸絵本の匠 山東京山』

巻(ぺりかん社、二〇〇四年)

図十一『身持扇』、早稲田大学図書館蔵本早稲田大学図書館古典籍総合データベース (<13-0237631)

【付記】図版の掲載を許された都立中央図書館、上田市立上田図書館、早稲田大学図書館に感謝いたします。

(すずぎ・なお

千葉大学大学院人文社会科学研究所博士後期課程在学)

【使用図版】

- 図一、図三『戯作問答』、都立中央図書館特別文庫蔵本(九六二)、国文学研究資料館マイクロフィルム資料(95-105-13)
図二『怪談摸摸夢字彙』、『山東京傳全集』第五巻(ぺりかん社、二〇〇九年)
図四・図五・図六『平仮名銭神問答』、『山東京傳全集』第四巻(ぺりかん社、二〇〇四年)
図七、図九『腹中名所図会』、上田市立上田図書館花月文庫蔵本(外題『腹の内名所図会』、(二二一六)、国文学研究資料館マイクロフィルム資料(92-394)
図八『貧富両道中之記』、『山東京傳全集』第三巻(ぺりかん社、二〇〇一年)

図十、図十二、図十三『御詠染長寿小紋』、『山東京傳全集』第四